

エデンの園の回復

ベレーシート

● 神のみこころ、ないしは神の救いのご計画のドラマを理解する上での鍵語は「イスラエルの回復」です。昨年の第一回の「荒野の学校」で、この視点をもたずして聖書の全体像を把握することはできないことが語られました。今回の第二回の「荒野の学校」で取り上げられたのは、「エデンの園の回復」という視点でした。「イスラエルの回復」と「エデンの園の回復」、そして「エルサレムの回復」がみな密接につながり、一つに重なっているということです。



● しかし、私たちの「エデンの園」に対するイメージはかなり曲解されてきているために、そこに神の深い啓示があることをなかなか理解できません。「エデンの園」に対する正しい理解が必要なのです。そのことによって、エゼキエル書におけるエルサレムの神殿の回復の預言、黙示録の「聖なる都エルサレム」のヴィジョン、神の栄光の回復、アブラハムを基とする「全イスラエルの回復」が、すべてひとつとなって完成するのです。

● 今回の「荒野の学校」でなされた教えの中で、「エデンの園」についての解き明かしは、私にとって強烈、かつ新鮮なものでした。それゆえ私はこの「エデンの園」についてさらに理解を深めたいと思い、このテーマについてキム・ウヒョン監督の語ったものを私というフィルターを通して理解しまとめたことを語りたいと思います。このことはキム・ウヒョン監督の了解を得ており、真理のいのちは常に相互の信頼の中で共有し融合すると信じるからです。

1. 「エデン」(עֵדֶן)についての旧約聖書原語コンコルダンス情報 (使用頻度 19/OT)

(1) 場所としての「エデン」(天地創造の時に神が設けられた園)

創世記 2:8 神である【主】は東の方エデンに園を設け、そこに主の形造った人を置かれた。

創世記 2:10 一つの川が、この園を潤すため、エデンから出ており、そこから分かれて、四つの源となっていた。

創世記 2:15 神である【主】は人を取り、エデンの園に置き、そこを耕させ、またそこを守らせた。

創世記 3:24 こうして、神は人を追放して、いのちの木への道を守るために、エデンの園の東に、ケルビムと輪を描いて回る炎の剣を置かれた。

創世記 4:16 それで、カインは、【主】の前から去って、エデンの東、ノデの地に住みついた。

イザヤ 51:3 まことに【主】はシオンを慰め、そのすべての廃墟を慰めて、その荒野をエデンのようにし、その砂漠を【主】の園のようにする。そこには楽しみと喜び、感謝と歌声とがある。

エゼキ 28:13 あなた(ツロの王のこと)は神の園、エデンにいて、あらゆる宝石があなたをおおっていた。赤めのう、トパーズ、ダイヤモンド、緑柱石、しまめのう、碧玉、サファイヤ、トルコ玉、エメラルド。

あなたのタンバリンと笛とは金で作られ、これらはあなたが造られた日に整えられていた。

エゼキ 31:9 わたしが、その枝(エジプトの王パロのこと)を茂らせ、美しく仕立てたので、神の園にあるエデンのすべての木々は、これをうらやんだ。

エゼキ 31:16 わたしがこれを穴に下る者たちとともによみに下らせたとき、わたしは諸国の民をその落ちる音で震えさせた。エデンのすべての木、レバノンのえり抜きの良い木、すべての水に潤う木は、地下の国で慰められた。

エゼキ 31:18 エデンの木のうち、その栄えと偉大さで、あなたはどれに似ているだろうか。あなたもエデンの木とともに地下の国に落とされ、剣で刺し殺された者とともに、割礼を受けていない者たちの間に横たわるようになる。これは、パロと、そのすべての大軍のことである。——神である主の御告げ——」

エゼキ 36:35 このとき、人々はこう言おう。『荒れ果てていたこの国は、エデンの園のようになった。廃墟となり、荒れ果て、くつがえされていた町々も城壁が築かれ、人が住むようになった』と。

ヨエル 2:3 彼らの前では、火が焼き尽くし、彼らのうしろでは、炎がなめ尽くす。彼らの来る前には、この国はエデンの園のようであるが、彼らの去ったあとでは、荒れ果てた荒野となる。これからのがれるものは一つもない。

(2) 贅沢、美味しいもの、楽しさを意味する「エデン」

Ⅱサム 1:24 イスラエルの娘らよ。サウルのために泣け。サウルは紅の薄絹をおまへたちにまとわせ、おまへたちの装いに金の飾りをつけてくれた。

詩篇 36:8 彼らはあなたの家の豊かさを心ゆくまで飲むでしょう。あなたの楽しみの流れを、あなたは彼らに飲ませなさいませ。

エレミヤ 51:34 『バビロンの王ネブカデレザルは、私を食い尽くし、私をかき乱して、からの器にした。竜のように私をのみこみ、私のおいしい物で腹を満たし、私を洗い流した。』

(3) 人物の名前としての「エデン」(ヒゼキヤ王時代のレビ人、祭司の名前であることが重要です)

Ⅱ歴代 29:12 そこで、レビ人は立ち上がった。ケハテ族からはアマサイの子マハテとアザルヤの子ヨエル、メラリ族からはアブディの子キシユとエハレルエルの子アザルヤ、ゲルシオン族からはジマの子ヨアフとヨアフの子エデン、

Ⅱ歴代 31:15 彼の下には、**エデン**、ミヌヤミン、ヨシユア、シエマヤ、アマルヤ、シエカヌヤがいて、忠実に祭司の町々にとどまり、彼らの兄弟たちに、各組にしたがい、上の者にも下の者にも分配した。

2. エデンの園のイメージ

●エデンの園のイメージはどのようなものでしょうか。果てしなく広がる平原、木々が緑豊かに、そして花が咲き乱れている光景でしょうか。ズバリ!! 「エデンの園」のイメージは、城壁で囲まれた城、あるいはフェンスで囲まれた場所としてのイメージが正解です。そもそも「園」というヘブル語は「ガン」(גן)で、それはフェンスに囲まれた地境という意味です。このピクチャーを脳裏に刻みつける必要があります。囲まれているのです。そこは、ちりで形造った人の鼻から息を吹きかけていのちを与えた神である主と人とが親しく、顔と顔を合わせなが

ら歩む場所です。鼻から息を吹きかけるという状態は、顔と顔が向き合って対面した状態であり、また、口づけ(キス)している状態でもあります。「顔と顔を合わせる」ことを、ヘブル語では「パーニーム エル パーニーム」と言い、人が自分の友と親しくかかわっている表現です。アブラハムもモーセも、神とそのような特別なかわりを持っていたことを聖書は記しています。

「神である【主】は東の方エデンに園(גֶּן)を設け(בָּנָה)、そこに主の形造った人を置かれた。」(創世記 2:8)

●エデンは「東の方」に設けられました(造られました)。聖書に出て来る地名、人名、方向などは、みな霊的な意味をもって書かれています。エデンの位置としての「東の方」とは、地理的に東の方向を意味しているだけでなく、昔、古代から、永遠にという含みがあります。東(「ケデム」קֶדֶם)の動詞は「カーダム」קָדַםで、「先立つ」「永遠の昔からの」「～の始まりから」という意味合いがあります。東方は「日の昇るところ」「永遠の光がある場所」、つまり、あらゆるものの原初的な起点を意味します。神はこの「東の方」にエデンを設けられたのです。そして、そこからののちの川が流れ出て、さらにそこから世界へと分かれ流れて行きます。そして重要なことは、そこに永遠なる**神の声**があるのです。

●イエス・キリストが「初めであり、終わりである」方であるとすれば、当然、エデンの園にもいたこととなります。また、イエス・キリストに対する信仰による救いに至らせる知恵も、エデンの園に啓示されていることになるのです。そのように、エデンには神の創造と救いの秘密が隠されているのです。

3. エデンの園に置かれた人の務め

「神である【主】は人を取り、エデンの園に置き、そこを**耕させ**、またそこを**守らせた**。」(創世記 2:15)

●神が「人」(アダム-אָדָם)をエデンの園に置いたのには、明確な目的がありました。それは、創世記 1 章とは異なる目的です。1 章では地上のすべての生き物を支配するという王としての務めでしたが、2 章ではエデンの園においてそこを**耕し**、そこを**守る**という務めです。

●キム・ウヒョン監督は、この務めを「祭司的務め」(祭司的使命)であると解釈しています。その根拠は、「耕す」というヘブル語の「アーヴァド」עָבַדと「守る」というヘブル語の「シャーマル」שָׁמַרという二つのことばにあります。この二つの語彙は、神に対する人の務めを規定するきわめて重要なものです。

(1) 前者の「耕す」の「アーヴァド」עָבַד

●単に「働く」という意味だけでなく、聖書全体から見るならば、しもべが主人に仕えることを意味する語彙として、特に、神の民が神に「仕える」(奉仕する)こと、神を「礼拝する」という意味で使われています。

(2) 後者の「守る」の「シャーマル」שָׁמַר

●ヘブル語の「シャーマル」שָׁמַרは、囲まれた園の中にあるいのちの川やいのちの木を、見守り、見張り、常に気を配りながら、神の語られる声に聞き従うことを意味します。これが最初の人である「アダム」に与えられた務めでした。この務めは聖書でいうならば、「祭司的務め」ということになるのです。

●私個人としては、神に仕え、神を礼拝していくこの祭司的務めの許容範囲の中に、人それぞれが神から与えられた賜物を正しく活かして、それを豊かにしていくことも含まれていると考えています。その根拠は、「あなたは園のどの木からでも思いのまま食べて良い。」とあるからです。しかし同時に「善悪の知識の木からは取って食べ

てならない」とも規定されています。自由に、かつ自発的に、そして創造的に楽しんで良い部分がエデンの園にはあるのです。しかし同時に、神とのかかわりにおいて絶対にこれだけはしてはならないという守るべき事柄もあるのです。それを守って生きることが、主に仕えることであり、また主を礼拝することだと考えます。

- しかしこの神と人とのかかわりの規定を根幹からゆるがす存在(へび)が現われ、人はその惑わしによって、守るべき重要な務め(神の声に聞き従うという務め)に失敗してしまいました。これが墮罪の出来事です。そのために、人はエデンの園から追放されることとなります。しかし、エデンの園の外でもエデンから取り出された土を「耕す」という祭司的使命は継続されるのです(創世記 3:23)。そして、やがてその務めを大々的に担う者が登場してきます。それが「イスラエルの民」です。

- そのルーツはアダムとエバから生まれたもう一人の男の子セツにまで遡ります(創世記 4:25)。このセツの系譜からアブラハムが生まれ、そのアブラハムからイスラエルの民が生まれ出ます。神は彼らを聖なる祭司の王国とするために、エジプトから荒野へと救い出して、そこで神の恵みと力を経験させます。そしてシナイ山の麓で神の教えを記したトーラー(律法)を与え、神の民としてご自身と契約を結ばせます。イスラエルの民はひとたび失われたエデンの園を回復するための器であり、彼らは聖なる律法によって約束の地(カナン)を耕し、その地を守るために神によって召され、選ばれた民です。それは、「地上のすべての民族は、あなた(アブラハム)によって祝福される」ことが実現されるためです(創世記 12:3)。ちなみに、このアブラハムを祝福する者を神は祝福し、アブラハムをのろう者を神はのろわれます。すべての者は、神が選んだアブラハム、その子孫であるイスラエルとどうかかわるかで祝福が分かれるのです。

- ところで、エデンの園を回復するために選ばれたイスラエルの民も、アダムと同様、失敗に終わります。約束の地と神の臨在の中心地であるエルサレムもその失敗のゆえに汚され、のろわれます。それゆえ、「エデンの園の回復」は「イスラエルの回復」、および「エルサレムの回復」と同義なのです。これら三つの回復は常に密接に関連し合っているのです。このことはきわめて重要な視点であり、私たちは聖書全体を通してこの関連性をさらに深く学ぶ必要があるのです。

4. 初めであり、終わりである方—イエス・キリストは第二のアダム

- ヨハネの黙示録には、イエス・キリストは「アルファであり、オメガである」方とあります。「最初であり、最後である。初めであり、終わりである」方です(黙示録 22:13)。ということはイエス・キリストは初めから終わりまで、すべての過程において存在していることとなります。それは、初めにおいても、また終わりにおいても、イエス・キリストが啓示されているということです。イエス・キリストにおいて明らかにされるすべての秘密が隠されているのです。

- 「**第二のアダム**」という表現は、エデンの園におけるアダムの務めの失敗の踏み直しの存在を意味する表現として、イエス・キリストのことを意味しています。またそれは、アダムの務めを引き継ぐために生まれた息子セツの系譜から出て来るアブラハムとその子孫のイスラエルの民の失敗の踏み直しの存在をも意味しています。この「第二のアダム」は、神のご計画の最終的な切札として、神の御子イエスに与えられた名称です。

- イエス・キリストは、本来、アダムに与えられたエデンの園における二つの祭司的使命—「耕すこと」「守ること」を、「第二のアダム」として回復されました。具体的には、神でありながら人となり、この世において神のし

もべとして仕え、息を引き取られるその最後まで完璧に神の律法に従うという形で、アダムの務めを踏み直されたのです。しかも同時に、その踏み直しによって、アダムの罪によってもたらされた死を滅ぼすという贖い(罪の身代わり)がなされました。それによって「エデンの園は回復」されたのです。しかしこの回復は、「イスラエル」「エルサレム」と同様、「**すでに、そして未だ**」なのです。神においては「すでに」実現していても、歴史的・時間的には「未だ」実現していないという緊張関係の中にあります。その緊張関係の中に私たちは今キリストにあって生かされているのです。

● 私たちは主イエス・キリストを通して与えられた福音(回復の良きおとずれ)を正しく理解しながら、神に仕え、神の教えを守ると同時に、その福音を人々に宣べ伝え、とりなしていくという祭司的使命を担う者として、上からの新しい油注ぎが与えられるように祈りたいと思います。

「エデン」と「新しいエルサレム」

創世記 2 章	黙示録 22 章
地	天(新しい天)
はじめ(アルファ)	終わり(オメガ)
エデンの園	聖なる都エルサレム
東の方(すべての源)	天から地へ
人をエデンの園に置いた	神の幕屋が人とともにある
東の方にあるエデン	(都の中央にある)神と小羊の御座
エデンから流れ出る一つの川 (四つの川の源の「四」とは全世界を意味します)	神と小羊の御座から流れ出るいのちの水の川
エデンの園を潤す	都の大通りの中央を流れていた
見るからに好ましく、 食べるに良いすべての木が生えている 一つの禁止を除いて、思いのまま食べられる	川のほとりにはいのちの木があり、12種の実が 毎月なる。木の葉は諸国をいやす。
鼻から息を吹きかけた	神の御顔を仰ぎ見る
園を耕し、守る人(アダム)	額に神の名が記されたしもべたち (神のみこころが刻まれたしもべたち)
のろわれるものはない (3章の墮落によって地はのろわれる)	のろわれるものはない
すべてのものを支配する王的務め(1章)、 エデンの園を耕し、守る祭司的務め(2章)	神に仕える祭司であり、王である
神は人とともにある (3章でアダムとエバを東の方へ追放される)	神の幕屋が人とともにある
イエス・キリストは、アルファであり、オメガ—最初であり、最後、—初めであり、終わり	